

●与謝野光・新聞進一〇編集
与謝野晶子選集Ⅲ

春秋社版

略 歴

よさのひかる
与謝野 光 明治36年1月、与謝野寛・晶子の長男として
東京都に生まる。大正15年慶大医学部卒業。
厚生省公衆衛生院教授、東京都防疫課長、東
京都衛生局長等を歴任、現在東京医科大学理
事、同大学高等看護学校校長、慶大文学部講
師、医学博士・第三次『明星』主宰。

しんましんいち
新聞進一 大正6年9月東京都に生まる。昭和15年東大
文学部国文学科卒業。北大助教授、文部省教
科書調査官を経て、現在青山学院大学教授。
専攻——中世歌謡、近代短歌。著書『歌謡史
の研究』『明治大正短歌史』その他。

晶子小説集

〔与謝野晶子選集・3〕

昭和42年7月10日 第1刷発行

定価 ¥300

検印
省略

編 者 与 謝 野 光
新 間 進 一
発 行 者 東京都千代田区外神田2の18
驚 尾 貢
印 刷 所 東京都台東区寿3の13の13
市川印刷株式会社

発行所 東京都千代田区 株式 春秋 社
外神田2の18 会社

電話 (255) 9611～5 振替 東京 24861

(徳住製本) 落丁・乱丁本はお取替えいたします。
N.D.C. 918

目次

明るみへ (長編) 七

明るみへ (補遺) 一五

親子 (短編) 一四

罌粟餅 (短編) 一六

『晶子小説集』出典一覧 二〇三

晶子の小説・戯曲・童話 新聞進一 二〇三

晶子小説集

凡 例

一、本巻には、与謝野晶子の小説三編を収めた。このうち、長編「明るみ」へは、単行本に拠って収めたが、その他、割愛された新聞十一回分を、「明るみへ」補遺として、東大図書館蔵の新聞により収録することにした。これはその一部分が湯浅光雄氏により紹介されたことがあっただけで、今まで世にひろく知られなかったものである。

一、文中の候文体の手紙のところ以外については、原文の旧かなづかいを現代かなづかいに改めた。また漢字を当用漢字の新字体にし、適宜漢字を仮名に改め、ルビをできるだけ省いたりした。

一、明確な誤りは正しておいた。例えば、正木・栗原とあったのが、後半、平木・栗山と誤ったのを、前者に統一した。

一、三編とも自伝的作品なので、モデルを「明るみへ」の巻首に一括して、示した。

一、口絵写真の一部について、第一巻のときと同じく、湯浅光雄氏の御協力を頂いた。

明 る み へ

長編小説

注 作中のモデル

小説「明るみへ」の登場人物は、ほとんど実在の人と思われる。すでに主人公寛・晶子夫妻の友人関係のものは、神崎清氏の『名作とそのモデル』に示されているが、それを骨子とし、肉親の人々を加え、なお推定し得るものを補い、左に掲げた。モデルを探索する興味からのみ読むのは邪道であるうが、晶子の私小説を正しく理解するためにはその比較も必要と思われるのである。なお短編「親子」「罌粟餅」のモデルについても、便宜上ここに付載しておく。

「明るみへ」の主要モデル

八阪透（与謝野寛）・京子（与謝野晶子）・篤（長男の光）・正（次男の秀）・寿満子（長女の八峰・次女の七瀬のふたり）・淑（三男の麟）・繁（与謝野修、寛の弟）お照（田上静子、寛の妹）・福岡の兄（赤松照幢、山口県徳山市在住、山口を福岡と改変）・菊地直麿（赤

松智城）・義也（赤松義麿）・忠三（鳳簫三郎、晶子の弟）・お雪（鳳
せい、その妻）・初子（夏子）・朔次（鳳祥孝、駿河屋現主人）・春子（志
知里、晶子の妹）・古谷佳男（志知善友、里の夫）・菊野（浅田信子）
・広江貞野（林滝野）・明（萃）・佐村金波（正富汪洋）・栗原先生
（森鷗外）・清水博士（上田敏）・伴野（平野万里）・竜造寺（万造寺
齊）・真鍋（茅野蕭々）・久子（茅野雅子）・正木（平出修）・三原（北
原白秋か）・吉村（森田草平）・川崎（江南文三か）・江藤（佐藤春夫）
・財部謹一（堀口大学）・英子（秋山花枝、光夫夫人）・竹村（武石
弘三郎）・小沢（金尾種次郎、文淵堂主）・田村（小林政治）・下田紫
山（生田葵山）・三重（坂本紅蓮洞か）・南（伊上凡骨）・那珂（中村
吉蔵）・中井（中山梟庵）・堀（堀部周三郎）・源（岩城達常）・お種
（おあい）・島（栗島狭衣）・玉木栄（三浦環）・鈴木古村（鈴木鼓村）
・朋子（平塚らいてう）

「親子」のモデル

橋本七夫（与謝野寛）・お浜（与謝野晶子）・先妻（林滝野）・実（萃）
・笹島（栗島狭衣）

「饅栗餅」のモデル

大木青花（与謝野寛）・露月（宅雁月か）・立花青葉（河野鉄南）・
山岡女史（山川登美子）・柴山医学博士（竹村清雄か）

面会お断り

廃兵殿、訪問記者殿、
行商者殿、空論家殿、

揮毫依頼者殿、

其他特別の御用なき諸君、

今後の生涯を愛重すべき厳肅なる自覚に由り、右諸
君の御諒察を乞ひ候。

と京子は読んだ。

「それをね、板へ書いて玄関へ下げとくのだよ。好い
だろう。」

透はこう言った。妻が何と言うかと窺うような目を
していること、目と目の間に縦の皺を二つ寄せている
こと、反した身体そらの右の肩はすぐにも跳びかかって人
が擲なれるほど気色けしきばんで揚あっていることなどを、京子
は見ないでも知っていた。

「面白いのね。」

京子はまだ俯向うつむいていた。

「大きな板に書いて置いてやるんだ。」

透は障子の方を向いて言っているのである。京子は
点頭うなずきながら、紙を畳の上に置いた。

「どしどし追払ってやらなくっちゃねえ、母かあさん。」

京子は顔を上げて、良人に微笑を見せていた。

「いいね。」

透は書いた物を手に取って、目の高さまで上げて笑
っていた。

「阪口なんか驚くだろうね。」

「ええ。」

「西野にしのなんかも空談家だからね。」

「西野さんなんかも入れるの、じゃあ範囲が広いの
ね。」

「広いとも。」

「でも西野さんはね、あなたのためにね、心配してる
人なんだもの。」

「何でもいいさ。」

透は厭な顔を見せた。

「真実^{ほんとう}にね、あなた、そんなことを書いて出さないでお置きなさいよ。」

京子は言^いって溜息^{ためいき}をついた。

「どうして。」

「馬鹿なことなんだもの。」

「馬鹿なことがあるものか、癡兵^{ちへい}は僕の居ない時^{とき}に来て、四、五銭の石鹼^{しけん}を一円にも売りつけて行くじゃないか。」

「癡兵はそうだけれど。」

京子は苦笑した。

「皆そうさ。」

「でもあなたの事をよく知らない人は憤^{おこ}りますわ。」

「憤る者には憤らせておくんだ。」

「けれどね、あなたは外^{ほか}から空談家が来ないと淋しくなりますわ、きっと。」

晴れやかな声になった。

「そうかね。僕は遊んでいるからね。」

透は書いた物をびりびりと両手で破^やって、机の下の反古籠^{ほんこかご}へ入れた。京子は自身の机に片肱^{ひじ}を突いて、良

人の膝のあたりに目を落としていた。

「淑^{しゆく}は居ないかい。」

と透は言^いった。淑は台所から書斎へつづいた廊下を、ばたばたと歩いて来た。

「なあに、父^{ちち}さん。」

「障子を開^あけて言え。」

淑は入^いって来た。竹に雀のあらい模様のあるメリンスの筒袖羽織を着て、白い胸当^{ちゅうどう}をしている。

「母さんなあに。」

淑は父親そっくりの顔を、京子の肩のところへ持^もっていった。

「なんです、あなた。」

「きよにね、お父さんの寝る蒲団と枕を持^もって来^こいと言え。」

透が言^いうと、淑は点頭^{てんとう}して出^でていった。

「返事をしない、失敬な奴だ。」

京子は、良人に寝られて今日の昼もまた薄暗くなっ
てしまうのかと思^{おも}いながら、真直ぐに坐りなおして机
で物を書き出した。

きよが銘仙^{めいせん}の懸蒲団^{かけ}と白い枕を主人に持って来た。

ころりと畳の上に透は横になった。

「人が来たら病気だと言っておおきよ。」

被^おいだ蒲団から顔を出して、妻に言った。

「そう。」

と言って、京子は點頭いた。

「母さんも遊べ、遊べ、そんなに勉強ばかりしたって、しようがないじゃないか。」

蒲団の中で言っていた。京子は書いてあった原稿の字を二、三行消した。万年筆を下へ置いて、誰か遊びに来ればいいと思った。振返って見ると、蒲団の下から血の色のいい透の足が二つ出ていた。京子は手を伸ばして、縁側の障子を五寸ほどそっと開けた。隣の庭で子供が遊んでいると見えて、揺^ゆられた棕櫚^{しやろ}の木が此^こ方の庭^{ちやう}へも栗^{あわ}のような花を零^{こぼ}している。八つ手の葉が日光を飽くほど吸いこんで生々しく広がった下に、黄色になった古葉が羽団扇^{はうちわ}を吊ったようにふらふらとしているのが、京子の氣に入^いった。飛石の向うに、昨日子供が土を返して植えたコスモスの苗が萎れて並んで

いるのを見ると、急にダリヤの芽生えを見に行きたい氣に京子はなった。

高々指^{たかたかゆび}についたインキを、袂から出した紙で拭き拭き、京子が縁側を歩いていると、障子の開^あいている座敷の中から淑が走って来て、母の袂をつかんだ。

「姉さんは。」

右の手で淑の頭を押しながら、京子は緩い調子で言った。

「お手玉をこしらえてもらっているの、きよに。」

「あなたは。」

「男だもの。」

袂を放して、二、三尺淑は前へ出て母の顔を見上げた。京子はちょっと眉を寄せた。子供の言葉から、書齋の良人の寝姿が目^めに浮かんで来たのである。京子は庭へ行かずに、淑の手を引いて座敷と縁続きの応接室のガラス障子を開^{ひら}けて入^{はい}った。赤い塗竹の椅子にぱたりと腰を下ろして、

「抱いて上げよう。」

と、京子は子の方に手を伸ばした。

「待ってね。」

と言って、淑はまた縁側を走って行った。京子は椅子を障子のそばへにじらせて行って庭を見ようとしたが、ふと煙草が欲しくなつて、立って来て卓の上のカメリヤを一本取った。そして今度は向う側の台湾竹の客椅子に掛けた。手を伸ばしてマッチを取ったが、煙草は口にくわえたまま、マッチは手の上に置いたままで、やや長くじつとしていた。京子は煙草を飲みながら、上に懸った三島修のフランスの田舎を描いた油絵を眺めるのであった。良人も洋行が出来たら嬉しいだろうと、何時もの通りなことを思っていた。三島と礼子夫人とが結婚した後で、橋渡しをした透にくれたのがこの絵であるから、これによって、よく礼子夫人のことが思わせられるのである。礼子夫人のすっきりとした姿が、京子は目に見えるように思った。こんな日に、礼子夫人は芝居を見に行っているだろうと思う下から、それが羨ましいようでは情けない自分だと思い、まさかねえ、まさかねえと心が泣き声を出して言った。しまいには、どの感情もごっちゃになって、口惜しい口

惜しい気ばかりが募ってしまった。

「母さん。」

淑が縁側から入って来た。

「淑さん、兄さんたちが学校から帰らないと淋しいでしょう。」

京子は吸殻落しに煙草を捨ててしまつて、淑を膝の上に載せた。淑は上から見ると、顔の半分より下に目がついたように見える子だと、可笑しく思ったりなどしていた。

手水鉢ちょうすいばちの水を使う音がした。

「江藤さんですか。」

廻り縁の南に向いた障子のガラスから、京子は外を覗いて言った。

その人は黙っていた。

京子は淑を立たせて、縁側へ出て行った。

「江藤さんだ。江藤さんだ。」

と、淑が言っていた。

「川崎さんじゃありませんか。」

京子は呆れたように言った。三田の学校へ行く江藤

が平常着ふだんぎについてこの間こしらえた紺の横三筋のセルの着物に、江藤の茶の博多の帯をして、その上へ前掛を川崎がしていたからである。

「え。」

とだけ川崎は言った。

「何時いついらしたの。」

京子はなつかしそうに言った。

「え。」

濡れた手を拭いた川崎は、急いで左の袖から白い手巾タナを出して顔に当てた。そうして京子に従したがって応接室へ入ると、川崎は直なおしてもらった椅子に、お辞儀をしながら掛けた。京子は川崎にどう物を言おうかと考えながら、先刻横さつきの方へ持って行った椅子を卓の前へ運んで来た。

「川崎さん、川崎さんてば。」

淑が川崎の膝を揺ゆぶっていた。

「ちっとも気が付きませんでしたわ。」

「盗賊どろぼうができますね。」

手巾ハンカチを下へ下ろして、川崎は何時いつものような優しい

笑顔を見せた。色の白い人の泣いたあとの顔が、赤斑あかまだらに見えた。

「珍しいことをお見せになるのね。」

「ええ。」

と言って、川崎は京子をじっと見た。

「どうしたのですか。」

「江藤の着物を着ているでしょう。」

「ええ。」

「大磯へ行ったのです。新橋から来たのですよ。別れるつもりだったのですが駄目ですよ。奥さん。」

川崎はこう言った。

「なぜ泣いていらっしゃるの。」

「だからです、奥さん。」

「よくわからないわ。」

「別れようと思ったのです。」

「それから。」

「汽車の中から泣いていたのです。」

淑がつまらなそうにして出て行った。

「僕はもう、奥さん、別れられません。」

「それでも好いじゃありませんか。」

京子の青ざめた顔が少し赤味を帯びて来た。

「先生はお留守ですか。」

「いいえ、居ますよ。あなた昨日から大磯へいらっしたの。」

「ええ、昨日から二度、行ったり来たりしたのです。」
「何故でしょう。」

「向うから来るのに行き違いになりましたね、私がそうして引返して下宿へ来ると、また向うが手紙を置いて帰ったあとでしたからね。」

「何時も大磯へ行く時は、そんな変装をしていらっしゃるの。」

京子は煙草を取って、手でなぶっている。

「今度だけです。談判が長くかかると思いましたからね、制帽を被て幾日も宿屋に居ると、誰かに見つかりますからね。」

「江藤さんにもそう言ってお借りになったの。」

「ええ、穿物まで借りましたよ奥さん。この姿は似合いますか。」

「そうね。心中でもしそうな人に見えますわ。」

川崎の細りとした肩つきを見ながら言っているうちに、思いついたらしく、

「まさか死ぬつもりじゃなかったでしょうね、そんなことねえ、川崎さん。」

と言った。

「死にやあしませんよ。」

と川崎は言った。

「そうね。」

京子は無邪気な、嬉しそうな顔をした。

「今朝ね、別れることに決めることは決めて来たのですよ、奥さん。けれど駄目ですね。」

「どんな方でしょう、私その方が見たい気がしてならないんですよ。」

「こんな眉です。」

川崎は人差し指で、逆八の字を顔にこしらえた。京子はそれを見ぬようにして、

「そう。」

と言った。

「肩は肥ってこんなのです。」

と言って、川崎は両方の肩を立てて見せた。思わず京子の肩もちょっと上がった。そして直ぐ京子は、この頃の自分の身体の弱々しいのが哀れに思われた。

「それじゃあ、あなた結婚をなさるの。」

「まだそんなことを考えませんよ、奥さんのお顔を見てからなんですよ、別れないでおこうと決めたのは。」

京子は點頭いた。

「先生は私のことを知っていらっしゃるのですか、奥さん。」

「私が言っても真実にしないんですよ。あの『金星』の小説なんか真実ですよ、あれに書いてあった手紙なんか私も見ましたよって言ったって、何んとも思わないですよ。この頃はよほど変ですからね、良人は。」

京子は声を低くして言った。

「でも先生は、奥さんにはあまり憤らないじゃありませんか。」

「癪にさわると思われただけで憤られないのは、なおいけないのですよ、川崎さん。」

京子は末子末子と良人の言う若い弟子の川崎には、

今まであまりこんなことは言わなかったのである。苦しいと思う事を言おうと思ったが、こんな言い現わしようにを初めにしては、複雑な良人の心持が説明されないだろうし、ただ自分をも良人をも卑しく見せるだけのものであると思っていた。

「けれど川崎さん、フランス語だけは熱心に稽古しますわ、良人は。」

またこんなことが京子の口へ出た。

「そうですか。毎日ですか。」

「毎日、五時間ぐらいですよ。」

「えらいですね。」

「西洋へ行きたいと見えますよ、真実にそれが一番好いのですがねえ。」

吐息をついたあとで、なぜこんなことばかりが言いたい日だろうと京子は思った。

「学校の人で、大変先生に同情してる人があるのですよ、弟子にはなりたくないから行かないんだけど、なんか言ってます。」

「珍しいことですね。」

と言って、また京子は、

「同情しているなんか言わないでのおおきなさいよ。憤

りますからね、なんでもないことにねえ。」

と、私語くように言った。

「心得てますよ。」

「あなたはもう泣きたくありませんか。」

と首を傾げて京子は訊いた。

「もう別れないんですから。」

川崎は恐縮したように言う。

「彼方の方はどうお思いになるかしら。」

「別れると初めに言った時、脳貧血を起こしましてね。」

思い出すように川崎が言った。透の足音が縁側にした。

「起きて来たのですよ。」

「寝ていらっしたのですか。」

京子は笑って點頭いた。

「川崎君が来ているの。」

と透が声をかけた。

「川崎さんがこんな姿をして。」

京子は良人を見上げて言った。

「ふむ、少し妙だね。」

川崎は立ち上がって軽く辞儀をした。京子は今まで居た椅子を良人に譲って、自身は客椅子の一つを取った。

「君早速だがね、正木君にそう言ってくれ給え、この間の『金星』なんか随分怪しい原稿が載ってるからね、あれじゃあ栗原先生に僕が済まないってね、もっとも家内の拙いものも載っていますかね。」

京子は川崎の顔を見て笑った。透のむかし出していた『新月』の後身のようなのが『金星』で、正木はその発行者である。栗原先生はそれを助けている文学博士で、一昨年の夏、金沢の高等学校を済ませて東京へ帰った時から、その編集の手伝いをしているのが川崎である。

「困るのですよ、僕が言っても駄目なんですからね、有馬君や野村君の言うことは正木さんは聞くのですがね。」